銀鈴

第參號

太刀風

多田東岳

成りし手に血汐はあつし太刀はとし
敵の幾萬今何すらむ

太刀は折れぬ力はつきぬはゝ笑みて
天の光明に靈は融けゆく

さばつるぎ刺せよ殺せよ同胞の犧牲
にある身は笑みて終らむ

れはけなき高き教も澤の子もさきは
ひなれば太刀は怨さむ

まことと見よ旅順の空は寒からむ大和
男の子の靈の太刀風

雪の日

ふたば女史

鼻唄小聲で股引の若い衆が、空車曳いたのと摺違いに、跛足の洋犬が慄ひ〳〵走つて通つた後を、大山嵐が眞一文字、雪に交つて西北から斯う、オヤたまるわたまるわ、全くよ、下駄の齒が埋るわ、來い〳〵達磨さん拵らへやうと、頰ぺた赤蕪のやうにしてこけつ轉げつ、子供は誠風の子よ。

こんな騒ぎ見向きもやらず、破毛布引被つて、尻切草履に畑の小道、一散走りに何處へ急ぐか、これも七八つのいたづら盛りなり。

『れい源公、何處へ行た。』

目敏く見つけた連中は、年嵩の十一ばかり、横撫のあとピカ〳〵。

『ウム勝さん何をするんだ。』

一寸振返つて立止まるを、

『面白い事をするんだ、來ねいか。』

下唇齒んで一寸手招けば、

『行き度いけれど阿父が待つてるもの。』

『何、阿父が。彼の兵士さんから歸つて來た

のか。』

『ア、。』

新道一つ隔てた小道に、毛布被つた頭二つ三つ點頭と見せぬ。

『阿父は又行くかい。』

一歩進んで小首傾げつ。

『何、彼りや歸されたんだ、よわ蟲だから大將に追ひ歸されただよ。』

頭から頭へかけて白布クル〳〵と繃帶卷いたが突如として口を挿みぬ。

『ウム、左樣だつてよ、つまらんなあ源公處の阿父は。』

竹杖したゝかに大地を叩きて、色の黑いのが又斯う。

『何弱いんのぢやないや、工合が惡いんぢや癒つたら直ぐに行くよ、又兵隊さんにならあ。』

一生懸命に源公は聲打ち慄はせぬ。

『何、もう兵士さんになられるもんかい。』

先刻の勝さん、

『のう秀さん、已ア處の阿父はなあ、遼陽の戰爭で伍長になつてな、今に金鵄勳章ぶら下げて歸つて來るんだ、大將になつて歸つて來るんだぞ。』

同じ年頃の刺栗頭、一寸八字の鼻の下に手眞似して肩怒らす。

『そう〳〵 初公處の阿父は賢いやゑらいや。』

『源公處の阿父は弱蟲だなあ。』

『源公、阿父は何日勳章貰うんだやイ。』

『追ひ返された弱蟲だーい。』

『やーい、やーい。』

負げじと言譯の涙聲は、脆くも消たれて、五六人が一度に囃し立つる鯨波の聲……果は無言の儘曲り角を一散走り、畑を越した土橋の袂にかゝりて、小さき溜息ほつとばかり、両の頰に溢るゝ涙細口にそつと拭ひし時、風につるゝ矢聲は幽かに……雪はますます降り切りて、可愛き足痕一歩一歩埋め行くめり。

（完）

年の訪れ

天涯の孤客

神の御仰せかしこみて
御詔大地につたへむと
天の聖廟歩み出で
黄金の翼はばたきて
けふ天降る新年の
光ぞげにも偉なる

神秘はあめのをごりなり
そが影永く地に引けば
空に彩ある紫金色
瑞き香りのみなぎりに
新衣被き花粧ひ
時の新郎いまこそ臨御せ

ゆん手に高う捧げしは
げにこの君の聖靈や
媚艶快樂の輝きに
眼もまぶしき金光の

さとほどばしりおほつちに
まず御旨やしめすらむ

その羽翼きの遠なりの
音はきかねどもあまづたふ
響はつちを揺りゆりて
あしたなりとのおん啓示
大天たかうゑがかれて
不滅の色ぞこもかりき

御伴とまねる瑠璃雲に
もれてはいづる奏樂あり
天の虚のかぎりなに
寂寞うたふ靈韻とや
わさ氣の波に舞ひふみて
空にまろばる靜けさよ

いま蘇生るもろもろは
聖宇に輝く靈光に
崇しき御業仰ぎ見て

榮ある終焉願はむと
讃じのみうた口誦して
ここにみむねを象徴れり

かく天地の歡樂に
光さざめく新ひ年は
聖き希望にみちみちて
天の夢路をしづしづと
いま大地にもたらせる
あゝ新春の常榮の日ぞ

大根引

月村

妹美代子、今年十七、長きいたつきに瘠せ衰へて、ともすれば、『兄い樣人生ッてつまらんのねー』と、朝夕慰めにいつた自分を泣しをつたが、先き頃都なる人から送つたバイブルを、讀み始めてからは打て變つて、次第に窶れる可憐の姿を見て思はず嚼い締ばる自分を、却て美代子が方から慰めるやうになつた。

秋の蝶聖書の上に眠りけり

小佛峠を右へ、里までのだら〳〵一里は、手の面程な田が段々になつて、両側はこんもりとした杉と小笹の立山、チン〳〵といふ水音は崖根の枯草の底から聞ゐてをる。

梢から猿の見て居る添水かな

今日の新聞でみると、寒凍烈風の滿州原頭にある忠勇なる我軍隊は、いよ〳〵奉天に迫つて一大活躍を試みるそうだ。

枕する刃鳴く夜や北時雨

九日は亡き父が命日、いつになく朝起して青松院に詣づべく朝飯も食はずに、溝口を渡つて松原を通りぬけ、長い石段をのぼれば木魚の音もしみ〴〵と、秋のあしたは又清寂なものである。

門にして柚味噌のにほひ普門品

白萩の塚といふのは萩ヶ岡の頂きにある、由緒などは知らぬが、あたりは一面に萩の茂つた原で、花時には時によると、村の誰それが酒肴の用意して遊びに行くそうだ。

風婆婆と月も出るべう萩明り

隣村から來て飛び込みの熊といふ男に、村の若い者が殘らず土を付けられて、今祭禮の花角力は火のようになつてをる、ところへ一番やるべいと土俵へ出て來たのは、豈計らんや何所でよばれたか眞赤に醉つぱらつてをる三太郎の八公である、一同はどつと大笑ひ、熊公も笑ひ乍らはらこいと片手をのべてひき倒そうとすると、八公の動かざること山の如し、みるまに熊公はウンとさし上げられた。

馬鹿面の手に力あり大根引

天長節の松陽に載せた春雨の『白骨』、われとそつくりの話が私のつい向ふの家にある、沙河の激戰で十一の彈丸をうけ名譽の戰死をした源次郎、白骨は金鵄勳章をかけて戻て來た。昨日の葬式にや郡長樣までがれ供たわ豪氣だと、村中のとりさた、一人のおふくろはめつきり眼病が募つたそうだ。

荒れ庭や淋しう笑まふ歸り花

風見車

入澤涼月

舞ひ舞ふはさながら天の使者のごと
われに似たりや戀の蝶々

花の香は堂に滿ちぬる宵の春小琴に
もらぐわがおもひ哉

わが才はちひさし神のみ手によりよ
き世と過ぎんねがひ持つ身の

やさ笑

福田紫雲

水垂るゝ花藻み髪にころよき朝風
たわず君をふくかな

蜜の香ややわき光や春の戸にわれら
つつみし神の名とはむ

朝あけや生駒葛城こむらさき黃金田
越わて子がうたもきく（以下三首管面にあそびて）

眞清水は紅き葉のせて音たてず谿間

たにまを徐かにめぐる
山の奥にこだまいよいよ神さびてわ
れおごそかにうた誦しまねる

作歌談（二）

袖影

試みに諸君は、今の舊派の歌をとりて考へ給へ、其如何に窮屈にも、一摸型のうちに逡巡する態あるかを認め得べく、彼等が詠まんとする詩材の多くは、古人の逍遙せし範圍を脱せざらんを努むるもの丶如きを見む。紅葉を詠ずるには、必らず鹿若くば水を配せずんば止まざるべく、月を詠ずるには、雁金、雲なんどの風情必らず伴ひなむ。而して諸君は其の修辞の更に窮屈なるに一驚を吃せん、彼等は古の歌に用ゐざりし語は、生硬といひ蕪雑と唱へて蛇蝎よりも尚ほ厭ふ也、而かも彼等の襲用しつ丶あるものが、既に今代の死語に屬せるを知らざるの迂、眞に笑ふべからずや。彼等は曰く、古へはすべて詞優なりしを、後の世に及びて、いと俗に流れ劣りたれば、されば歌詠まん人は古きみやび詞を用ふべきものにして、俗なる今の詞は顧みざれと。美を感納せんには、徒らに詞優しきを要せず、時代の標準語を以て時代の思潮を歌へば足る。かのこちたき意味も通せぬ詞を並べて、雅なりと心得、さらでだに時代に遠ざかりぬる國學者の、亞流となりなんこと、如何に馬鹿げたらずや。

詩人は時代の代表者なりと云へり、然るに彼等は平安朝の精神を平安朝の詞もて歌へる古歌人なり。これ今の社會と縁遠き所以。鐵道をまがね路といひ、軍艦をくろ船といへる類の笑話は少からぬものを。

立て青年詩人よ、卿等は努めて、彼等の陷穽にな誘はれそ。卿等は卿等の思想を卿等の詞もて歌ひ給へ、卿等既に今代の思潮に接し今代の詞に生活す、誰夫れ卿等自身の感想を赤裸々に表現せよ、修辞の工夫はやがて卿等の筆端に躍々として産れなむ。詩の前に卿等は傍若無人たれ、愛すべき驕慢は終に燦として文學史上の華を飾らん、摸倣を避けよ、先人

はなかつた、そして短歌に關する結社と云ふものも暫らくは耳にせなかつた。

■三十四年の末、翠瀲は新に文學の結社彩雲會を起した、『彩雲』と云ふ機關は翠瀲が豐富な詩想を卷頭に裝ふてあらはれた、誌上の短歌また何れも新らしい形をそなへたものであつたけれ共惜しい哉これも一號を出したぎり再び聲をばつゞけなかつたので、

■讃つて當時中央のそれはどーであつたろう？『紫』が出る、『みだれ髪』が出る更に『かぐ土』が出ると云ふ騷ぎ、新らしい短詩は、こゝに大なるエナージイを以て高く輝き出したのである。

■斯くの如くである以上、無論地方のそれも點々の裡に葬られてはゐなかつた、新らしく短歌の結社と云ふものは一時に頭を擧げ、聲を放つて詩の領をあさらんとした。

■が創立當時だけに見るべきものと云つては余りに多くはなかつたらしく思はれた、最も多くの歌人の血を騷かしめ、地方歌壇の花を飾つたのは三十五年であつた。

■中絶の姿であつた二葉會は蘇みかへつた、白虹が高潔な信仰をうたひ出して、歌壇は早くも彼れが名を認めた、松風會は門戸を開放して多くの歌人を集めて叫號する、この二つは最も多くの詠草を發表したものであつた。

■尙詠草を發表したのは、碧雲の『しののめ會』會員ははじめから終りまで殆んど新らしい名を認めなかつたものの、詠草はたへず發表してゐた、閨秀作家の『ちぐさ會』といふのも一二回出た樣に思ふ、此外個人としてのも少くはなかつた、これは煩を避ける爲めやめてゐたかふ。

■やゝ遲れてこの樣に思ふが、翠瀲は『島根新報』に日曜歌壇を開いて盛んに鼓吹し初めた、『山陰』紙上には咀華選の下に多くの詠草が集まつた、その頃の、『松陽』『山陰』『島根』の三新聞を開いて見て、殆んど短歌の載つてゐないのか少いのを見たならは思ひ半ばに過ぐるだらう。

■それから紫虹社と云ふのは、醉芳、咀華、翠瀲等によつて創設せられた、その目的の一

面には、云はゞ群雄割據の狀態であつた當時の斯壇を統一せうと云ふ、企圖であつたらしい、けれども惜しい哉その實は擧がらなかつた、これは何とも遺憾千萬である。

■斯くの如く旺盛も旺盛、實にその極点に達してゐたと云ふ位『明星』誌上、全國に於ける、最も盛んな地の一として數へられたのも當然の理である。

■斯くて此旺勢なる歷史を繰り返すべく、永く未來の紀念として詩集落穗集一卷は白虹の手によつて編まれたので、最も是は主として二葉會と松風會との詠草であつた、そして獨り短詩のみでなく長詩をも集められたので。

■あゝ落穗集！優に誇るべきこの詩集、その發刊は如何なる現象を幾多青春の詩人に與へたらう！以前の旺盛に一倍の勢力を與へ、更らに地方歌壇に一新機軸を現はすことゝ思ひきや、それは單なる忘想に過ぎなかつた、詩集發刊後の歌壇は寥々として昔時の姿を認めなかつた、幾多の士女は遂に再びその消息をもらさなかつたのである。

■松風會は暫らく名を保つた、而し紫芳、紫瀾などの從來の同人は絶えて見えなかつた。二葉會は、只白虹と幸子の舞臺にのみなつた。新に吟月の白扇會は成つたけれども、以前の如く歌人は集まらなかつた。

■新涼會がうぶ聲を擧げたのは、昨年の夏ごろであつた、從來の詩會が漸く沈默を守らんとする時、翠瀲が此擧は、確かに賞讃に値するので、何となく心強く感せられる、會に關係がある者が、斯樣なことを言ふと、自分を高うするものだと嘲けられるかも知れぬが、決して自惚れでもなんでもない、詩集『白檀弓』の發刊と云ひ『銀鈴』の發行と云ひ、熱誠のない人の手にはなり難いことであらう。

■兎も角、こう思ひ出て見ると、種々な變化が、數へらるゝのである、この後果して如何なる發展をなすことであらうか、かつて聲をあげた夥多の歌人達が、暗に研讃を怠らなかつたと假定すると、最早や、再度の叫號を試むるときではなかるまいか、でなくても近き將來に於て、より美はしい紅白の花を以て斯

壇を飾らなければならないだろう、否僕はそれを夢みながら、この稿を草したのである。

（十二月四日稿）

一夜の感興、この拙稿をなす。斯ることをくり返すの偶を知る、諒之。更らに、當時の狀をさぐる何等かの材料もあらず、眞の思ひ出で也

袖

銀鈴社編輯局選

課題の難きが故か、集まるもの僅かに二十四首、内左の三首を選拔せり。吾人はこの佳作なるを世に誇ると共に、會員諸氏の更に努力せんことを望む。當撰の二氏に對しては紀念のため本號一部宛を献せり。

○ 二葉

枕してみ袖に笑まん日は知らずかくれて呼ぶに美はしとのみ
夕寒き風をいたみておん肩に袖まねらする桔梗細道

○ 紫瀾

七尺は神のたびにし丈とこそ小さきかひなもまくにおそれじ

香草

○ 山本 明星（出雲）

君が名とわが名きざみておほ天のかの黄金戸は今も榮ねなむ

○ 片山 蘆水（石見）

ほこりがのまなざしやがてくだちなばめしひ雌鳥のさすらふがごと

○ 立田 紅翠（松江）

ふと胸しにぬび入りける夢の香のわれにさびしきれもひはこばむ

○ 尼川 紫瀾（石見）

そのひかり冷たき耳に天降りきて共鳴すべくめざめしや石（「銀鈴」に）
やるされて裁ちしや袖のこむらさきひれふる風は天の香に吹く

○ 近藤 月村（石見）

たもたひに三年秘めこし我がなげきよべの夢うら心もとなき

またの期に語らば興はれはからめ一夜旅寢のとぞろき（紫瀾の君に）

○ 天涯の孤客（松江）

花被ぎ野に金星をふしめ見て夢とも座せり春の花王
ひとつ野に春を生ひたるゑにしなり天へのともぞむらさきの蝶
かうやうの思ひは深く胸に秘め夕日に小笠かたむけて行け

○ 山下あき子（石見）

このおもひこの戀歌に美しうかの金星と世をかざりてむ

○ 河野 素陽（石見）

ふりそでの六尺長き舞姫や京は水よき女よき所ぞ

○ 田邊 馬笑（石見）

夢よびてこの世詩の國秋老いぬ我を我としいざ出でたゝむ

○ 大屋 桂水（石見）

うらぶれの我にはゆるせ鈴ふりてふりて友よぶ秋の野の蟲
現それまぼろしさなり涙なり乳子笑む夢よ永久にさめざれ
ゆるぎては玉とくだけて花とちる海がをしへの犧牲や榮あり
ひかりてはきねてはまたも闇に入る螢にも似む我が詩の靈

○ 河野 翠瀲（石見）

いつの日にわれはこの里竹れほく竹の風きく室におかれし
れのづからこの歌成りぬ譜もなりぬ知らずいづれにわが戀は成る

○ 三東 如月（石見）

輝やかに華雲湧きぬれば富士や神のみ子具し立つよこの君
美はしき鄕に敎へて詩の神のよすがしのまゝに兒等みちひかん
銀鈴や音もはがらにかざしつゝ神に詣でのこの道まねる

花環

（新涼會 松江支部）

○ 坂本 笑風

君にまゐる白百合の香に歌かかむミレをまねびしこの繪筆もて

○ 稻田 紫園

山の端に片破月のかかるとき天地ゆれと木枯よふく

○ 金本 征帆

紫の朱の花環と君が身の燃ゆる血汐よ永久にさめざれ

○ 西 枯荻

花にして消ねばいとゞ幸ならめ露のはこりとわれを讃せむ

冷けき小さき甍をいだく身も雄姿なれば天日は見る

瑞樹

（新涼會 濱田支部）

○ 須田 紫萍

みちびきのみ笛いみじう遠鳴りて神の玉戸に小羊のむれ

○ 森岡 蹄花

月の夜の君琴よぶか欄に立ち我は李白を高呼びてまし

○ 河野 素陽

とゞむべき君歌なしや會心の律は成らさり秋雨の宿

○ 增野 翅白

さゝらぎの瑞樹のもとにうまいしてエデンの夢に天をれもはむ

みとびらにふれし小指はしびれたりうたの子そゞろ幼なきを愧づ

藝の子の今さびしらの興を得て鑿もてまゐる天つ御柱

吹雪

魚市や人競ひの鯛一尾　梨村

新室や夢も圓かに秋の宵　蕗村

秋靜か思ひがけなき落葉哉

（翠瀲を訪ひて）　露の子

若鮎の水底すゞしき戀あらん　萤村

若鮎の君あこがれて下らんか　紫瀾

すきまより霰吹きこむ寒さ哉　汐波

芒散る野を柩行く夕かな　孤叫

川寒き風に且つ散る芒かな

突喚の聲をゞよもす霰かな

遼東に征衣のまゝや年あらた

戰死者の墓標しぐるる荒野哉　すわ湖

風呂吹の馳走も嬉し田舍家

鶺鴒のなく聲しげき吹雪哉　木風

遣羽子を取つてくれ鳧同禮者

左義長や清涼殿のあけはなれ

初夢のさめてをかしき思ひ哉

門松や昔ながらの士族町

門松に名札あたらし村の醫者

大鯛に蛭子召しませ夷子講

良き佛ばかり集まる十夜哉

着袴の其子の顔も親の顔

何もかも人に低せて冬籠

一輪の茶の花ときぬ垣の隅

茶の花の句や寺の這入口

渡し場に二十日の月や冬木立

病む人の傷口如何に霜柱

土運ぶ土手のきれ途や霜柱

海苔の香に雜煮の餅を愛し鳧　あき子

落穗

（二葉會）

高低の霜メートルや足の胼　遁郷

意氣地なき僧の居眠る炬燵哉

昨日今日俄の寒や置こたつ　硯海

晝の間も孫と白髮は炬燵哉

水汲みの胼みて泣きし老女哉　無銘

人魂の話で寒き炬燵哉

顏のひゞ白粉つけし女かな　萩猪

風烈しひとりで占したつ哉

胼いかに大根洗ふ頬かむり　督包

五人では都合の悪しき炬燵哉

貧乏や夜長に寒き冷こたつ　魂休

川風にひゞはまかせて渡し守

出征の身の思はるゝこたつ哉　三痴

日當りに猫も留守なる炬燵哉

洗濯にひゞの噂や霜の朝

胼の手を透し見上げし虛無僧哉　月村

赤胼や古手拭の納豆賣
戸の外は十里の寒野炬燵哉

編輯餘言

▲本誌本號は、新年號として稍々体裁を一新いたし候。さりながら既に寄稿を諸せられ候諸君の内延着未着等により、掲載し得ざるものあるは同人の深く遺憾とする處に候。

▲本號表紙繪は昨年一月の雜誌『明星』『みだれ髪歌がるた』畫き給ひし一人の君に候、本社翠瀲の懇囑を容れて、特に寄せ給ひしは同人等の感謝する處に候。

▲次號の本誌には與謝野鐵幹氏および錦織錦繻子氏の稿、藏田二葉女史の『いたいけ』石橋汐波氏の『夕暮』、其他入澤涼月、青戸白虹、多田東岳、福田紫雲、尼川紫瀾、諸氏の稿並に本社翠瀲の『新涼會の過去と現在』出づべく候。

▲寄稿は総て半紙半面十行二十字詰の割に淨書せられ度く、ハガキ半切紙等は整理上甚だ困り入候、なほ和歌、俳句其他用紙を區別して記載被下度、特に注意致置候。

▲寄贈の新刊雜誌左の通りに候。

●白虹　第一號　岡山市　血汐會
●關西實業新聞　第九號　廣島縣　關西勸業社
●艸笛　第二ノ一〇　松江布　報光社
●新文藝　號外　岐阜市　新文藝社
●發句壹萬集　出雲　赤名硯友會

これ等の批評は次號に讓り候。

▲會友近藤月村氏昨年十一月本社を訪はれ候、本社の朝風、翠瀲之と會談致候。

▲新涼會は左の所に支部を設け候、仝地方會員諸氏は爾今幾分便宜を得られ候事と信じ候

松江支部　松江市新町周藤方　西力造君方
濱田支部　濱田町紺屋町　增野三良君方
米子支部　米子町尾高町遠藤方　前田弘君方

なほ各地に支部の設置を希望致候。

▲會員又は讀者諸君は精々同志の糾合に努められ度懇請致候。

▲松江『松陽新報』紙が常に文學の鼓吹に努

むるは、吾人の感謝して措かざるところに候

▲『山陰新聞』懸賞小說募集の擧は、單調なる地方文壇に多少の波瀾を起し得たりと信じ候、さりながら其募集の要件に於て、撰者を公表せざるは暴なり、明かに應募者を侮辱したるものなりと存候。應募の篇數比較的僅少なりしとと、全誌のため之を惜み候。

▲『しのゝめ會』『二葉會』『紫菫會』の諸子が研讃の實を擧げられ候事をよろこび候。

◉廣告

學の友

毎月一日一回發行
一冊金四錢、七冊（半年分）前金貳拾八錢、十四冊（一年分）前金五十貳錢
郵稅不要切手代用一割增

『學の友』は專ら小學兒童の好伴侶となり又家庭少年の良師友となるべき學術雜誌であつて其の記事も教育家の寄稿數篇の外は皆大方讀者の投書のでありますが

內容は○學の友○談海○史傳○寄書○小說○學藝○雜錄○詞叢○討論等でありますが別に「名刺交換」といつて少年の筆蹟をも掲載しますから面白くして中々に爲にもなります學術に志ある少年諸君は早く來つて此の『學の友』と交り玉へ

投書は誰にても汎く歡迎いたします

發行所 出雲國赤名 學友雜誌社

廣告

謹賀新年

乙巳元旦

新涼會

銀鈴社

謹みて新年の祝詞申述べ候

乙巳第一日

銀鈴社編輯局

佐々木朝風

大屋桂水

河野翠瀲

◉碧雲會（松江市南田）

●本會は明治三十年松江に創立したる者にして關西に於て最も古き歴史を有する俳會也●本會には何人にても入會するを得但し機關の俳誌『草笛』の讀者たる事を要す●例會は當分第一土曜夜北田普門院に開く會費五錢、殘餘金を生じたる時は『草笛』發行費に加ふ。平時の雜詠は『松陽新報』に掲載し佳句は別に『ほとゝぎす』に報告し且本誌の俳句分類に加ふ

本誌定價

隔月發行

種別	定價	郵稅	合計
一ヶ月	參錢	貳錢	五錢
一ヶ年	拾八錢	拾貳錢	參拾錢
廣告料	一行拾錢	一ページ貳圓	

▲誌代廣告料等總べて前金の事

▲本誌特別號に對しては誌代不同

明治三十七年十二月廿五日印刷

明治三十八年一月一日發行

〔本號壹部賣七錢〕

編輯兼發行者　島根縣邑智郡田所村大字下田所七百卅二番地　河野岩雄

印刷者　島根縣飯石郡赤名村大字赤名八百三番地　木村柳三郎

印刷所　同縣同郡同村大字同二百八十一番地　赤名活版所

發行所　島根縣邑智郡田所村　銀鈴社

取次所　石見國濱田町榮町　安達共榮堂

古井圭山房